

# 協働性の育成

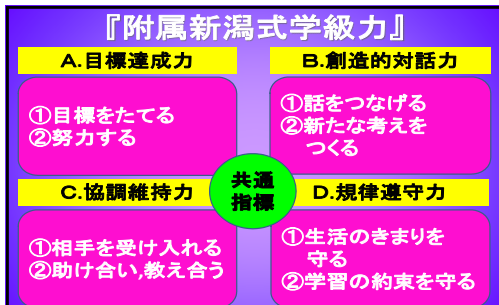
## 1 協働性育成部の基本方針

### (1) 協働性とは

当校では、「附属新潟式学級力（以下、「学級力」）」「対話する」スキルを高める取組を実践してきた。

「学級力」の定義

子どもが支持的な学級風土をつくっていきこうとする力



この「学級力」を全校体制で高めるために、4領域8項目から成る共通指標を設定し、朝の20分間の活動時間枠「クラスカルチャータイム（以下、CCT）」で取組を進めている。

また、左図の共通指標の中で、「B創造的対話力」について学級の課題が挙げられた際に、学習スキルの一つである「対話する」スキルを高める取組も実践してきた。

「対話する」スキルの定義

友達の考えを分かろうとして聴く話の聞き方

中学年にひつような学習のわざ(学習スキル)	
書く	★ 自分の考えを整理して書く ・「でも」「だから」「なぜなら」など、つながりを示す接続語を使って書く。
「対話する」スキル	★ 相手の意図を分かろうとして聴く ・「ああ」「分かる、分かる」 ・「そうか」「なるほど」 ・「言いたいことが分かる気がする」 ★ 自分とはことなる考えも共感して聴く ・「今の意見は、いいと思うけれど…」 ・「ここまでは、私と違いますよ」と思っています」
話す	★ 自分の考えを整理して話す ・「～です。理由は、…だからです」など、結論を言ってから理由を話す。 ・「でも」「だから」「なぜなら」など、つながりを示す接続語を使って話す。 ★ 相手に分かるように話す ・図・表や具体物を示しながら話す。 ・相手に同意を求めながら話す。

この「対話する」スキルを全校体制で高めるために、低・中・高学年部ごとの共通ポスターを教室に掲示し、「知る、経験する場面」「発揮する場面」という二つの場面を設定して、取組を進めてきた。

これら「学級力」や「対話する」スキルを高める取組を積み重ねていく中で、CCTや授業などの様々な教育活動において、次のような姿が見られるようになってきた。

- ・学習の課題を意識して、友達とかかわり合いながら活動に取り組もうとする姿
- ・学習の目的を共有して、友達の発言に対して共感、付加、要約、疑問等の反応を示し、学習を進めていきこうとする姿
- ・なかよし班（全校縦割り班）の活動で、互いに声を掛け合いながら、活動の目的を達成しようとする姿

私たちはこのような子どもの姿を分析し、見えてきた共通部分を全校体制で育成する資質・能力の一つとして設定した。

協働性の定義

他者と目的や課題を共有し、互いのよさや多様性を生かして課題解決に向かう態度

CCT、特別活動（学校行事と委員会活動）、各教科等の授業において、協働性を発揮させる。そして、発揮した協働性の自覚を促す取組を意図的・計画的に繰り返すことにより育成している。

## (2) 育成方法

協働性を育成する四つのステップ		
ステップ	教師の働き掛け (例)	促される子どもの姿
目的や課題の共有	理想とする結果を問う	大切にしたい集団の目標を設定する
見通し	自分が何をどのように頑張りたいかを問う	集団の一員として自分ができることを考える
実行課題解決	他者とかかわる必然性がある活動を設定する	集団の目標と自分のめあてを意識して他者とかかわる
振り返り	視点を与えて振り返らせる	他者とかかわりに着目して活動を振り返る

CCTと特別活動では、協働性を育成する四つのステップがある。中でも、目的や課題の共有から見通しまでが子どもの協働性育成のために重要である。なぜなら、協働性を発揮するためには学習の目的や課題の共有、価値観および成果の共有が欠かせないからである(坂本2008)。

左の協働性を育成する四つのステップを基に、目的や課題の共有から見通しについてCCTと委員会活動とを説明する。

### 【CCT：目的や課題の共有】

まず、「学級力」を高めるための取組を考える場面を設定する。このとき、「よりよい学級にするために人の話をしっかりと聴くことが大切だ」などと、子どもが考えたとする。このように「学級力」の中の「創造的対話力」に課題を感じた姿を見取り、意図的に「対話する」スキルを高める活動を設定することが大切である。

### 【CCT：見通し】

課題を共有した子どもに、具体的な活動を示し、その活動の中で集団の一員として何ができるかを問う。子どもは、学級で共有した課題と自分にできることを関連付けて考え、「友達の考えに反応しながら聴く」などと自分のめあてを決める。

### 【委員会活動：目的や課題の共有】

まず、5・6年生がよりよい学校を築いていくという目的を共有できるように、4月初旬には高学年部集会を開く。そして、昨年度の成果と課題を共有させ、よりよい学校を築いていくために設置が必要となる委員会を子どもに話し合わせる。すると子どもは、昨年度の経験や学校の現状を基に、よりよい学校を築いていくために必要な委員会について話し合う。

### 【委員会活動：見通し】

設置が必要となる委員会が決定し、メンバーが決まった後は、活動の方針を決定する。具体的には、前年度に「いつ・何を・どのように取組を実施したのか」という状況を把握させ、取組の成果と課題を検討させる場面を設定するのである。その後、今年度の学校の状況も踏まえて委員会で実施していく取組を決定する。

### 【各教科等の授業】

授業においては、協働性の発揮が各教科等の資質・能力の育成に有効であることが見えてきた。例えば、生活科の動物飼育活動で説明する。動物の世話は毎日欠かすことができない。動物にいつまでも元気でいてほしいという目的を共有した子どもは、その日の気温や湿度などを考えて必要な世話を話し合ったり、役割分担をしたりして世話をする。このような活動を毎日繰り返す中で、「動物に親しみ、大切にしようとする態度」が育成される。

## (3) 協働性育成を支える組織とシステム

まず、協働性育成部は、全校の取組を推進するために協働性育成のための取組計画を提案する(P)。そして、活動する時間や振り返りを実施する時間を設定する(D)。学級担任は、計画に沿って取組を進める。次に、毎月末、低・中・高学年部の会議を設定する(C)。この場において、取組にかかわった職員で実施した取組の分析と次に生かせることを話し合う。そして、会議で挙げた意見を基に、協働性育成部が取組の改善策を提案し、全体に提案する(A)。

## 2 協働性育成部の取組

P

平成30年度 附属大運動会 実施計画 (案)		
協働性を育成する運動会の取組		
ステップ	教師の働き掛け (例)	促される子どもの姿
目的や課題の共有	全校ダンスの目的を伝える	活動の結果を知り、活動に対する意欲を高める
見通し	なかよし班で練習に取り組む場を設定する	なかよし班で教え合いながらダンス練習を行う
実行課題解決	他者とかかわる必然性がある活動を設定する	練習の成果を生かして、ダンスを踊る
振り返り	視点を与えて振り返らせる	他者とかかわりに着目して活動を振り返る

まず、行事担当者及び協働性育成部が、協働性の発揮と自覚を促すことができる取組を提案する。

このとき、協働性を発揮している姿を具体的に設定し、四つのステップにおいて「何を・いつ・どのように」取り組むのかを共有することが大切である。

例えば運動会では、「オリジナルダンスを教え合いながら運動会においてみんなで踊りを楽しむことができる」姿を設定した。そして、職員会議で提案された取組を全職員で共有した。

このように、全職員が「何を・いつ・どのように」取り組むのかを共有してから実施する。

D

次に、行事担当者及び協働性育成部が、協働性の発揮と自覚を促すために活動する時間や振り返らせる時間を設定する。

運動会では、各学年から集まったダンスリーダーが協働性育成部の職員と共に練習を計画・実施した。

練習の場においてダンスリーダーは、振り付けを身振り手振りで教えていた。ダンスリーダー以外の子どもは、分からないところを聞いていた。そして、運動会当日は、保護者や地域の方にオリジナルダンスを披露した。

活動後は、協働性育成部が自覚を促す時間を設定する。このとき、ワークシートで振り返らせたり、なかよし班で手紙を渡し、相手のよかったところを評価させたりするなど、取組の内容と合わせて自覚を促した。

発揮した協働性の自覚を促すときは、どのような内容を記述させるのかを協働性育成部で検討することが大切である。振り返りの視点が曖昧だと、発揮した協働性の自覚を促すことができないからである。

運動会では、ワークシートで振り返らせた。自分ができるようになったことと理由を記述させた。

このように、ねらいとする協働性の発揮と自覚を促す取組を意図的・計画的・組織的に実施する。



C

そして、協働性育成部が、子どもの姿を基に取組の成果と課題を話し合う場を設定する。この場では、取組にかかわった職員で協働性を発揮している写真や映像、子どものワークシートを活用しながら話し合う。そして、話し合われたことを基に、協働性育成部でその後の行事の取組案を考える。運動会で見られた課題は次の通りである。



- ①振り付けを覚えることに意識が向き、何のためにダンスを踊るのかという目的が曖昧になっていた（目的や課題の共有における課題）。
- ②全体の目的に対して自分は何ができるかという意識が曖昧になっていた（見通しにおける課題）。

これらの課題から「何のために取り組むのか・自分は何ができるのか」を明確にしていないと、協働性が発揮されないことが見えてきた。

A

最後に、改善した取組案を共有するために、協働性育成部が次の行事における取組案を職員会議で提案する。

このとき、取組の成果と課題を踏まえて全職員で「何を・いつ・どのように」実施していくのかを検討することが大切である。

運動会の成果と課題を踏まえると、目的や課題の共有のさせ方と見通しのもたせ方を改善する必要があることが分かった。

1～4年生登山において、改善したのは次の2点である。

- ①集団の目標を設定する場を設ける（目的や課題の共有における改善）。
- ②個人のめあてを設定する場を設ける（見通しにおける改善）。

実際の活動で子どもは、なかよし班の目標と個人のめあてを意識して活動していた。振り返りの記述からも、目的の共有から見通しの場面を改善したことが有効であったことが検証できた。

このように、次の行事に生かすことに重点を置いた組織とシステムを構築し子どもの協働性を育成している。

### 協働性を育成する登山の取組

ステップ	教師の働き掛け (例)	促される子どもの姿
目的や課題の共有	どのような登山にしたいかを問う	登山において、大切にしたいなかよし班の目標を設定する
見通し	自分が何をどのように頑張りたいかを問う	なかよし班の目標に対して、自分に何ができるのかを考える
実行課題解決	他者とかかわる必然性がある活動を設定する	なかよし班の目標と自分のめあてを意識して登山をする
振り返り	視点を与えて振り返らせる	なかよし班の目標と自分のめあてに着目して活動を振り返る

※ 色が付いているところは、改善点

## 3 成果と課題

協働性を育成するためには目的や課題の共有から見通しまでが重要であることが見えてきた。各取組において、成果と課題の分析を通して、次の取組に生かせることは何かを検討してきた結果である。

課題は、取組の精選である。CCT、特別活動、各教科等の授業のすべてで実施しようとする多くの時間を必要とする。限られた時間の中で効率的に取り組むために、どの取組を継続していくかを校内で検討する必要がある。